
oyal F mily

ゆちゃん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

o y a l f m i l y

【Nコード】

N 2 1 6 7 F

【作者名】

ゆちゃん

【あらすじ】

彼女の歩いていく道は、何処へ・・・。

1 足目（前書き）

初めまして、私グリケイディア王国第一皇女アルビオンと申します。
以後お見知りおきを、よろしくお願い致しますわ。

1 足目

「お嬢様、お目覚めの時間でございます」

「……ん」

「……今日はいい天気でございますよ」

「午後にお散歩したいわ、いいかしら？」

「はい、それではこちらに」

グリケイディア王国 第一皇女アルビオン

彼女の朝は側近のスイの一言から始まる。

皇女の朝は早い。

「へっ……ぶえつくしよい……」

「お嬢様」

「は、はい」

「そのくしゃみ、もう少しお淑やかにしてくださいませ」
「すみません」

スイは厳しいけど、何処か姉のようにしてくれる。
10も年が離れていれば、必然とそうなるのもわかるけど。

「おはようございます、お嬢様。」

「おはよう、サンゴ」

「お食事中申し訳ありませんが、本日の公務の説明を」
「どうぞ、話して」

サンゴはスイと同じ側近で、
厳しく、真面目、堅苦しい と3つ揃ってる

いわゆる堅物。

「アルビオン様、聞いておられますか？」

「す、すみません。ちよつと・・・」

いきなり笑い出した私にサンゴは厳しい目をする。

紅茶を口に含むと、ダージリンの甘い濃厚な味が広がった。

「やあ、おはよう諸君」

「・・・！」

私以外の全てのものが、地にひざを付く。

「お父様、おはようございます」

「やあ、アルビオン今日も美しいね」

「お褒めの言葉、光栄にございます」

父、グリケイディア王は足が悪く

車椅子の生活が多い。

今も側近に車椅子を押され、食卓に現れたよう。

それからは、父と私の朝の食事の時間。

この時間は1日の間で唯一、父と娘でいられる時間だったりする。

その昔、グリケイディア王国には

1人の優秀な皇子と1人の不幸な少女がおりました。

皇子は学問にも精通し、武芸もさることながら
まさに文武両道というとても優秀な少年でした。

少女は学問にこそ精通はしているものの、
武芸には全くの無頓着。

ましてや、両親を戦争で亡くすという可愛そうな運命の少女でした。

皇子と少女の出会いに通っていた学院でした。

皇子は男女とはず人気で、

少女は図書館で毎日本を読む、

それが2人の普通の日常でした。

ある日、皇子と少女はとても不思議な出会いをします。

少女がとても読みたい本を目の前で皇子に借りられてしまうのです。

この時、グリケイディアでは、レディーファーストがマナーでした
ので

少女は皇子とあろう方がと啖呵を切ってしまうのです。

今となつては、それは運命的だったのかも知れません。
お互い名前しか知らない2人が出会い、

皇子はそれから女性と遊ぶのを辞めました。
本人には無意識だったのかも知れませんが
周りから見れば少女との出会いが引き金になったと言われているの
です。

ある夜、学院でのパーティがあつた時、
少女はパーティには興味はなく、
その日は夜も図書館で本を読んでいました。
ただその日は何だか集中出来ず、
パーティが行われている講堂を見つめていました。

そこに1人の来客。

それは正装をした皇子でした。

少女は皇子に驚き、皮肉な言葉ばかりを並べてしまいます。

皇子は一言

『君に会いに来た』

と言いました。

少女は大人しく、皇子の手を取り、図書館で初めてのワルツを踊り
ました。

皇子の心の中に少女がいたように、
少女の心の中にも皇子がいたのです。

周囲は2人の付き合いを反対しました。

皇子の両親である国王と国王陛下は、何も言わず
少女は学院の友達から虐めを受けましたが

元々頑固な性格ゆえ、何をされても負ける気はしなかったようです。

2人が学院を卒業する時、少女は皇子の手を取り
両親がいる自分の住んでいた村を訪れます。
小さくひっそりと立てられた墓に少年は1つの誓いを立てます。

『彼女はとても澄んだ心を持っています。』

そして、何にも変えることの出来ない、大切な存在です。
学院を卒業し、私は父の後を継ぐべく、様々なことをしていかなく
てはいけません。

しかし、そこに彼女のいない生活は耐えることが出来ません。
周りは勿論反対をしています。

それでもいいと私は考えています。そばに彼女さえいれば、それで
ご両親に今日は、そのことを伝えに来ました。

彼女さえいれば、皇子の地位など、どうでもいいと、私は心からそ
う思うのです。

心から彼女を愛していると、ここに誓いを』

少女は涙を流し、

とても嬉しそうに皇子に抱きつきました。

2人は手を取り、王と王妃の下に向かいました。

2人が城に着くと、国王陛下が少女の手を取りどこかに行っていました。
いました。

『お前が愛しているのは、親のない孤児院の貧乏な女だ。
お前も知つての通り、周りからの反対の声が殆どだ。
しかしそれでも、彼女と婚約をすると申すか？』

国王の言葉をかみ締めるように皇子は、頷きました。

皇子は一言、国王である自分の父親にこう言ったのです。

『皇子としてではなく、一人の男として彼女を愛しているのです』

国王は微笑み、それを認めました。

それからの期間はあっという間に過ぎ、

2人が婚約をしたと発表をすると

認めてくれる国民などおらず、

学院を卒業した4年後の22歳の時に

2人はひっそりと小さな教会で結婚式をあげました。

豪華なドレスも、豪華な食事も、豪華な招待客も
何もない本当に小さな結婚式でした。

でも皇子も少女も本当に幸せそうで、
それを知った国民たちも、少しずつではありますが
2人のことを認めるようになっていったのです。

2人が結婚してから、数年後
待望の赤ちゃんが産まれました。
第一皇子と第一皇女。

その2人の皇子と皇女はとても優秀に育ち、

とても両親と似ていました。

国民たちは愛に家柄など関係ないのだと改めて実感したのです。

優秀な血を持った皇子。

不幸な血を持った少女。

2人が仲睦まじくしている姿は

とても国民から支持を得ました。

それからというもののグリケイディア王国では、

第一皇子と第一皇女が産まれると

とても縁起がいいとされていました。

それは今日の今でも引き継がれているのです。

グリケイディア王国 第二王期、第十二章 45頁～49頁

「第一皇子と第一皇女ね・・・」

本を閉じ、物思いにふけるアルビオン皇女。

彼女の前途多難は日々はこれから始まるのである。

1 足目（後書き）

作者のゆチャンです、どうも。

友人と話していた時に出来た話です。

脚色はあたしがしているのですが、

元々の話は2人で作ってます。

途中の話は長いですね。。。w

変えるかも知れません

それでは次回を楽しみにお待ちくださいませ。

メールフォーム作りました。

何かあればどうぞ。

<http://www.formzu.net/fgen.ex?>

ID=P83852656

2 杯目（前書き）

今日も今日で、いつもと同じようにで
何処か違う1日が始まる。

2 杯目

「お嬢様、お嬢様聞いていらっしやいますか？」

「ああ、すみません。サンゴ何ですか？」

「・・・本日午後より予定していましたが・・・」

「あー、確かレディシユアの大臣が来るとかいっ」

「はい、その件で少し問題が・・・」

「何かしら」

毎日こんな感じに忙しかったりする。

それも皇女だから仕方ないけれど、

お父様があの様子な今、国交を行っているのは

この私だったりする。

「・・・工場の跡形もないですって!？」

「お嬢様声が大きいですよ」

「そ、そりゃあ大きくだつてなるでしょう」

「お嬢様、お気を確かに・・・」

スイが入れてくれたアッサムのいい香りがする。

それを手に取り、息を落ち着かせた。

我がグリケイディアと少し離れたレディシユアは

昔から、それも私の曾祖父のもっと前からの付き合いで
お互いの出資で何個も工場を持っていたりする。

今回はそのことでレディシユアの大臣が商談で来るはず

・・・だっただけ。

「その情報は何処から？」

「それが匿名でして」

「匿名？」

「ええ、手紙でしかも王ではなく、お嬢様に」

「・・・私に・・・」

私に來た手紙類は、スイやサンゴが最初に目を通すことになっている。

サンゴが差し出した手紙を受け取り、目を通す。

「・・・『レディシユアにあるグリケイディア、レディシユアの工場が跡形もなく消えている』か・・・」

「それを見に行かせたんですが、そしたら実際に・・・」

スイが差し出す何枚かの写真。

そこには数ヶ月前には建っていた工場が消えていた。

「レディシユアから連絡はないのよね？」

「ええ、先ほど大臣に確認をしましたら予定通り伺うと・・・」

「・・・そうね、とりあえず商談の話を聞いてみましょう」

「「はっ」「」

「それと・・・」

「・・・明日から出掛けるのでその準備を」

私の言葉にサンゴとスイは頷いた。

「・・・兄さん、今何処にいるのよ」

私の呟いた言葉は誰にも聞かれていることはなかった。

「アルビオン皇女、お待たせして申し訳ない」

「いえ、大丈夫ですわ」

「暫く見ぬ前に、また美しゅうなりましたな」

「そんなお世辞を、ありがたき受け取っておきます」

レディシユアの大臣は少し前に見た時よりも、身に着けている物が豪華になっている気がする。

帽子、洋服、眼鏡、靴、そして杖まで

メイドが持ってきた紅茶を大臣は口に含んだ。

「国王がよろしくと言っておりました」

「レディシユアでは、何かありましたか？」

「いえ、毎日平和で国王も皇子も皇女も暇だとばかりに」

「ふふ、平和なのはいいことだけれど」

大臣は終始笑顔。

スイヤサンゴが少し厳しい目をしている。

「・・・お土産といてドレスを何着かお持ちしましたので」

「まあ、ありがとうございます。着るのが楽しみだわ」

「きつとお似合いですよ」

次第に顔つきが変わってくる。

私はあえて、笑顔のままで答える。

「それで、商談というのは……」

「あ、そうでした。実は……」

商談が終わったのは大臣が部屋に入ってきて
1時間半後のことだった。

「つまり、工場を大きくしたいので出資してくれと……」

「そういうことでしょうね」

「……飄々と、きっとこのことは……」

「……王やその息子、娘たちは知らないでしょうね」

私が手に持つてるのは、大臣が持ってきた言わば帳簿のようなもの。
これもきつと嘘なんだろうけど。

「お父様に話をしてくるわ。工場が無くなった話は伏せておくよう
に」

「わかりました、お供します」

「サンゴは土産を持ってきておいてちょうだい」

「はっ」

私はスイと一緒にお父様の下に向かう。
スイは何処か心配そう。

「こんな時に兄さんは・・・」

「・・・お嬢様」

「私がこんなこと言っではいけないんだけどね」

苦笑するとスイは更に心配そうな顔をした。

こんなこと慣れているはずなのに。

あの時から、迷わないと決めたのに。。

ねえ、兄さんは今何処にいるの？

2 杯目（後書き）

お久しぶりです、ゆちゃんです。

書き直し全くしてないのです。

書き上げたの1話目作った日です。

つまりなんであげなかったんじゃーってことですw

メールフォーム

<http://www.formzu.net/fgen-ex?>

ID=P83852656

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2167f/>

oyal F mily

2011年1月18日03時28分発行